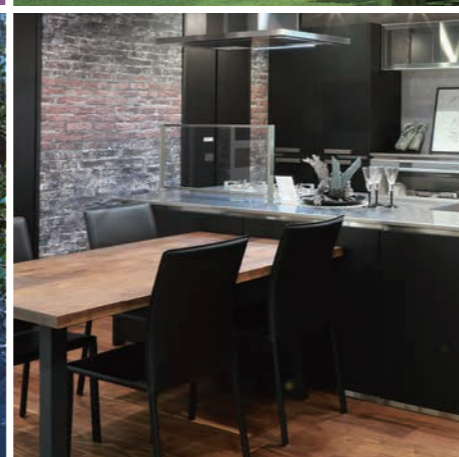


kigokoro

EIDAI Corporate PR Magazine Winter 2020 / vol.3



kigokoro

Winter 2020 / vol.3

第3号 令和2年1月1日発行
編集・発行：永大産業株式会社 ヴォケインテグレーション部 広報課
〒559-8658 大阪府住之江区平林南2-10-60 TEL:06-6684-3058 FAX:06-6684-3051



好きを暮らしに

Skism

スキスム



「心地いい、暮らし空間」の新提案

好きを暮らしに。
自分スタイルの空間づくり。

しあわせを感じるの「好きなもの」との出会いから。
好きを選んで、自由に組み合わせ、
気がつけば、家族の笑顔がはじける心地いい暮らしがはじまります。

EIDAIの「Skism」は、自分らしい暮らしを応援。
好みのテイストとデザインを選ぶだけで
あなたが想い描いた、憧れの空間が手に入ります。

木を活かし、よりよい暮らしを
EIDAI | 永大産業株式会社
www.eidai.com

お客様相談センター
☎ 0120-685-110
【受付時間】 平日・土曜日9:00~18:00(休業日:日曜日、祝日、夏期休暇、年末年始)

EIDAI ショールームでお確かめください。

EIDAI SR

検索



「遊べRU」「並べRU」収納BOXでお悩み解決！ここがルルボのポイント！



ポイボックス

こんな所にゴミ箱が！！それがポイボックスです。壁面に収納されるので、お部屋の中もスッキリ。樹脂製なので丸洗いもOKです。また、A4サイズが収納できる大きさなのでマガジンラックとしても使用できます。



ミニポイ(3個セット)

小物の整理って難しくありませんか？ミニポイならそのようなお悩みも解決します。取り付けもフラットバーに引っ掛けるだけなので簡単です。

ポイカケ

着ていた上着をちょっと掛けたい時ってありませんか？そんな時に便利なのがポイカケ。使わない時はスッキリ収納できます。



開発者の声

企画チームと開発チームがタッグを組み、女性ならではの視点も活かして完成させました。

「いつもココが気に入らない？」「そうそう！わかるわかる！」企画中はそんな会話はばかり。暮らしを見つめる女性ならではの開発秘話を、中心メンバーとして取り組んだ林が語ります。

「最初は、既存のニッチ収納のバリエーションを広げようという程度の軽い話だったんです」と、開発の背景から語り始めた林。でも、暮らしの悩みを話し合ってみると子どもはリビングで着替えるよね「洗面室で出る」も別したい！「って、どどんと気が出てきて。それなら、とことん突き詰めてみよう！と、企画チームと開発チームが密に連携。家じゅうで使えるコンパクト収納へとコンセプトが膨らみました。

まず、こだわったのは1つのボックスのサイズです。在来工法に多い130mmの壁厚を想定し、その奥行きを最大限に活かしつつ、使い勝手のいいサイズ感を模索。「奥行130mmって意外といろんなモノが置けて、何が入っているかもパッと見て分かります。たとえばトイレなら、トイレッペーパーが3つ横並びで入るように。何を入れたいか、収納物から逆算してボックスやオプションアイテムを設計しました。」



内装システム事業部 商品部 商品開発二課 企画グループ 林 有生

「そして、背板や扉のカラーがアクセントになればいいな。そして、ボックスは取り外せば丸洗いもできるように樹脂製としました。当初、扉は必要なのでは？という指摘もあったのですが、「やっぱり隠したいモノもありますし、オープンなボックスだけだと収納物が限られてしまいます。私自身、整理整頓は得意ではなく、押し込んでしまうタイプなので(笑)、扉を用意して良かったですね。」

とはいえ、苦労も多く、特に試作段階では納得のいく仕上がりになるまで金型の修正を繰り返したのだとか。それだけに、完成品を実際に施工してみた時には「思い描いていた、オシャレでかわいい子が生まれた!!」と感動しました。産みの苦しみを乗り越えた自信作「ルルボ」。きっと、いろんな暮らしのシーンで活躍します。

新製品紹介

暮らし彩るコンパクト収納

RURUBO

ルルボ

上手な壁の使い方で、生活満足度が変わる。
暮らし彩るコンパクト収納
ルルボ

2019年10月に発売した「ルルボ」は、生活動線にある「壁」の厚みを活かしたコンパクトな収納製品。驚くほど自然にモノが片付き、インテリアのアクセントにもなる、そんな特長を詳しくご紹介しましょう。



必要なモノを必要な場所にすっきり置いて
プランニングや施工もカンタン！

「すぐにリビングが散らかって、お掃除ロボットも動かせない」「洗面所がゴチャゴチャ、お客様には見せられない」「...そんなお悩みをオシャレに解決する「ルルボ」。ネーミングには、「選べる(RU)／並べる(RD)／ボックス(BOX)」の意味を込めました。その名の通り、ボックス型のユニットを多彩に組み合わせられる自由度の高さが最大の特長。壁厚を利用して、必要なモノを必要な場所に置く「適材適所」の収納が実現します。

基本的なプランニングは、ボックスの種類(9種類)、背板や扉の色柄(7種類)、オプション(7種類)を選択するだけの3ステップで完成。背板や扉の色柄は、当社の主力ブランド「Skism(スキスム)」と同じ7柄としているため、スキスム製品とのコーディネートもお楽しみいただけます。またオプションは、壁面にダストボックスを設置できる「ポイボックス」、小物の定置管理に最適な「ミニポイ」、洋服などを一時掛けできる「ポイカケ」の3つのキーアイテムをはじめ、より機能的に「ルルボ」をお使いいただけるアイテムを揃えました。

さらに設置スタイルも、用途や設置場所に応じて「壁埋め込み」「壁付け」を選択でき、またボックスは完成品で納入するので施工に手間がかかりません。リビングやキッチン、洗面室など様々な場所で、わが家流の収納ライフをお楽しみください。

社会貢献活動 車いすアメフトの支援活動を展開

当社は、2018年から日本車いすアメリカンフットボール協会が推進する「車いすアメフト」の普及活動を応援しています。

山口県で初のイベント

「みんなで車いすアメフトを楽しもう in 平生」を開催



みんなで車いすアメフトを楽しもう in 平生



第2回永大カップ

当社は、子どもからお年寄りまで誰もが安全に使用でき、バリアフリーに配慮した建材「セーフケアプラス」の開発、販売を行っています。その事業を展開するなかで出会ったのが「障がいの有無にかかわらず、競技者全員が大切である」との考えに基づいた「車いすアメフト」でした。

当社はこの考えに賛同し、2018年からその普及活動を行う日本車いすアメリカンフットボール協会(大阪市、糸賀亨弥代表理事)を継続的に支援しています。この車いすアメフト(正式名称Wheelchair Football)とは、同協会が開発したアメリカンフットボールをベースとするスポーツで、名称に「車いす」とありますが、競技に「車いす」を使用するだけで、障がいの有無にかかわらず、その場にいる全ての人が参加できるという点が特長です。

具体的な活動として2018年11月と2019年3月に、当社の生産拠点(大阪事業所)のある大阪府堺市で、車いすアメフトの大会「永大カップ」を開催しました。

2019年10月には同協会との共催で、山口県では初となるイベント「みんなで車いすアメフトを楽しもう in 平生」を開催しました。

この催しは堺市に続き、山口・平生事業所のある平生町での開催を目指したのですが、自治体や団体、企業のご協力が得られ、参加者の方々からも、非常に良かったとの声が寄せられました。

当社では今後も、「車いすアメフト」の普及活動を応援していく予定です。

SDGsの取り組み 再生可能エネルギーの創出

環境負荷の低減に向けて (バイオマス発電、太陽光発電)

当社では経営五カ年計画「EIDAI Advance Plan 2023」の基本方針のひとつに「SDGsの取り組み」を掲げています。今回のkigokoro labでは、その取り組みの中から、環境負荷の低減を目的とした再生可能エネルギーの創出に焦点を当てました。

持続可能な社会の形成に向けて

経営五カ年計画では、経営基盤の強化と新たな価値の創造を通じて、すべてのステークホルダーと共存共栄できる企業になることを明示しています。

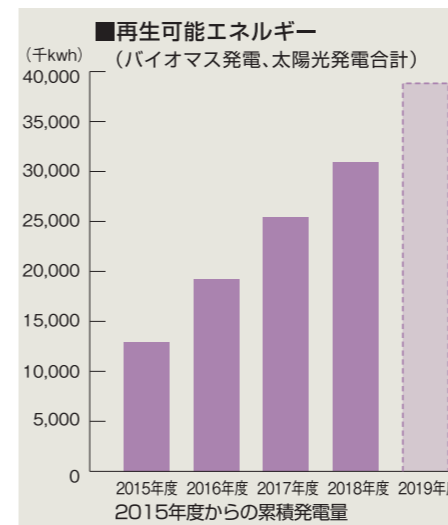
そのためには、当社が持続可能な社会形成や地域社会に貢献する企業でなければなりません。当社では進んで社会的な課題やニーズに対応する企業を目指し、2030年までの国際目標すなわちSDGsに取り組みごしました。

環境面では具体的に、①木質ボード事業における未利用材・端材・建築解体材などの有効活用と木材の循環利用 ②南洋材から国産材利用への移行、推進 ③南洋材からPBへの移行、推進 ④プレカットを中心とした省施工製品の拡大による廃棄物の抑制 ⑤太陽光発電、バイオマス発電による再生可能エネルギーの創出を挙げています。

今回ご紹介するのは5つ目に挙げた取り組みです。

2事業所で再生可能エネルギーを創出

今日、不用になった木質廃材や山林における間伐材を燃料にタービンを回し、エネルギーを取り出して利用する「バイオマス発電」は、それほど珍しくなくなりましたが、当社では今から27年前、業界に先駆けてバイオマス発電プラントを工場に設置し、その発電によって工場で使用する電力の一部を賄う取り組みを始めました。



フローリングの主力生産拠点である山口・平生事業所(山口県)では、1993年11月にバイオマス発電設備の1号機が、また5年後の1998年4月に2号機が稼働しました。これらが生み出す電力(毎時1650キロワット)は同事業所が消費する全電力の26%(2018年度実績)に相当します。同事業所ではまた、2014年に太陽光発電設備も導入し、同年3月から発電を開始しました。発電量は年平均60キロワットで、こちらの電力は全量を売電しています。

太陽光発電については、山口・平生事業所のほか、室内ドアや収納、造作材を生産する大阪事業所でも、同様に設備を導入し、2015年10月から発電を始めました。大阪事業所における発電量は年平均48キロワットで、こちらの電力も全量を売電しています。



太陽光発電(山口・平生事業所)



太陽光発電(大阪事業所)



バイオマス発電機(山口・平生事業所)



バイオマス発電プラント(山口・平生事業所)

日本の原風景

第三回 東京都文京区
三四郎池(育徳園心字池)



夏目漱石の長編小説「三四郎」のモチーフとなった舞台

東京大学内にひっそりと佇む三四郎池。東大生の憩いの場であると共に、観光客が夏目漱石を想い訪れる。秋晴れの空の下、ひとときの安らぎを求め訪ねてみた。

「それから、この木と水の感じ(エフェクト)がね——たいしたものじゃないが、なにしろ東京のまん中にあるんだから——静かでしょう。こういう所でないで学問をやるにはいけませんね。近ごろは東京があまりやかましくなりすぎて困る(夏目漱石『三四郎』)」。ここは東京都文京区本郷、東京大学本郷キャンパス内にある三四郎池。夏目漱石が田舎から東京に出て来た小川三四郎の成長と様々な人々との交流を描いた「三四郎」の舞台となった場所だ。歴史を感じさせる赤レンガの学舎を背景に、多くの木々が四季折々の景観を奏しませてくれる。そのなかにひっそりとたたずむ三四郎池は、一瞬それが大都会のキャンパス内にあるということをお忘れさせるほどであった。三四郎池とは前田利常(前田利家の四男)が江戸時代に築いた大名荘園「育徳園」の名残りで、正式名称は「育徳園心字池」。加賀百万石の名に恥じない立派な庭園だった。その後、明治維新で官有地となり明治10年に東京大学がこの地に誕生した。夏目漱石が何を思い、執筆したのかペンチに腰をおろし池を眺めながら暫し、思いに浸ってみた。



新宿ショールーム

ショールーム紹介

「激戦区」でより一層の存在感を

地の利の良い新宿ショールームには関東全域から毎月多くのお客様がいらっしゃいます。この新宿区から渋谷区にかけての一角は、住宅設備機器メーカーのショールームが集中しており、集客の相乗効果が期待できる反面、国内最大の「激戦区」でもあります。

こうした環境の中、当ショールームでは豊富な品揃えと、お客様への確かなご提案で、これからもより一層存在感を示してまいりますと考えております(加藤)。

住所 〒163-0812 東京都新宿区西新宿2-4-1 新宿NSビル12F
TEL 03-3349-1971(代)
休館日 水曜日、夏期・年末年始、5月連休、
新宿NSビル休館日(2月第4日曜日、8月第1日曜日)
営業時間 AM10:00~PM5:00



◇新宿ショールームスタッフ◇
写真左から、赤尾、上野、内海、加藤(ショールームマネージャー)です。

ちよつと一息の column 木は自然のエアコン

室内の暑さや寒さをやわらげ、湿度まで調節。 木は、まるでエアコンのように働きます。

熱を伝えにくい空気がギュッと詰まった木は「熱伝導率」がきわめて小さい素材。

お料理に使う鍋の取手が鉄製やステンレス製だと、すぐに熱くなってしまい、鍋つかみを使わずにはいられません。でも、木製の取手ならそれほど熱くならないのはなぜでしょう。

これは、木が無数の細胞からできており、その一つひとつが空気で満たされているからです。空気には熱を伝えにくい性質があるため、空気が詰まった細胞の集まりである木も「熱伝導率」がきわめて小さい素材であるといえます。

この性質を住まいに活かせば、夏は涼しく冬は暖かく、木材が室内の温熱環境を心地よく整えてくれます。そして木の中でも熱伝導率が小さいのは、ナラやブナなどの広葉樹よりも、スギやヒノキなどの針葉樹。冬は針葉樹のほうが冷たさを感じにくいとされています。

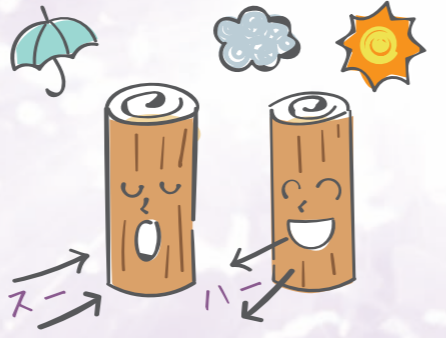
木で一般的なグラスウールと同等の断熱性を得るには相当な厚みが必要になるので、木材だけで断熱材とするのは現実的ではありませんが、木は見た目にも温もりを感じる事が強み。断熱材などと上手に組み合わせ、居心地のよい住まいをつくりましょう。

湿気が多いと吸って、少なければ吐いて。「呼吸する素材」として湿度もコントロール。

木材は断熱性能に優れているだけでなく、しっかりと乾燥させてからインテリアに使われる木材は調湿性能も発揮します。梅雨どきなど、室内の湿度がジメジメと高いときは湿気を吸収し、逆に冬場などに乾燥してくると湿気を放出。こうした働きにより、木は切り出されて木材になってからも「まるで生きているかのように呼吸する素材」と言われています。

人にとって快適な湿度は40~60%程度とされていますが、木はちょうど50%前後の湿度を保つように作用し、結露やカビなどを防いで健やかな住環境へと導いてくれます。空気中に浮遊している無数の菌やウイルスも、湿度が50%程度の環境では死滅していくので、さらに室内がクリーンな空気で満たされます。

暑さや寒さをやわらげ、湿度まで調節してくれる木材は、まさに「自然のエアコン」。木の性能を最大限に活かし、電力に頼らない、エコで家計にもやさしい暮らしを実現してみませんか。



東京都世田谷区は人口91万7000人(2019年11月)と、23区内で最も人口が多いことで知られ、7年前の同時期(86万1000人)と比べると、ほぼ地方の1都市分、人口が増えています。これに対し受け皿はまだまだ不足しがちで、特に小さな子どもを持つ若い世代にとって近くに信頼できる保育園ができることは、「何よりもうれしい知らせ」と受け止められているようです。



【指詰め防止部材(指はさまんぞう)】
扉の隙間に伸縮可能なネット状のスクリーンを設置して、建具の開閉時に指を挟まないよう工夫しています。



【チャイルドロックと取っ手】
子どもが誤って扉をロックしたり、開閉したりしないように錠を高い位置に設置。取っ手は握りやすいように大きくなっています。



【引き違い吊り戸(全面透明アクリル)】
全面を透明にすることで、部屋の様子を確認しやすいようにしています。



【引き違い吊り戸(丸窓)】
保健室は子どものストレスを和らげるため、丸い窓を用いています。



最新
納入事例

室内ドア
収納家具

幼稚園・保育園・認定こども園 セーフケアプラス

EDDAはセーフケアプラスを通じて、子どもたちと見守る先生方、そして子どもたちの保護者の皆様すべてが安心できる空間づくりをお手伝いします。

人口の多い首都圏では、共働きのご夫婦にとって子どもたちを安心して預けることのできる保育園の存在が、年々重要性を増しています。EDDAは子どもたちの安全を第一に、見守る先生方が快適に利用でき、かつ勤めに出ている保護者にとっても安心できる、そのような安全・快適な製品づくりを目指しています。今回は東京都世田谷区で2019年7月に開園したばかりの「YMCA保育園ねがい」を訪問し、実際にご利用いただいている製品について感想をうかがいました。

園長先生の声

園児一人ひとりを大切に見守っていくために

もともと、この場所には公立の保育園がありました(別の場所に移転)。「YMCA保育園ねがい」はもとの建物をリノベーションして、2019年7月に開園しました。現在は0~5歳までの園児、約40名をお預かりしています。開園にあたり、園児一人ひとりを大切に見守っていきたくて考えていたため、建具は職員室や教室、園庭までを見通すことができる視認性の良いものを要望していました。その点で透明なアクリル板を全面にはめ込んだ引き戸は希望通りの製品でした。

来年の入園を希望する保護者の方が見学にいらっしゃいますが、この見通しの良い引き戸は評価が高いように思えます。また、園児が指を挟まないよう扉に切り欠きがあり、その部分が見えないよう同色の柔らかいパッキングが付いている点や、開き戸で指詰めを防止するスクリーン状の「指はさまんぞう」の工夫も良かったと思います。



園長 高橋 里香さん



工務店・ビルダーの働き方改革③

業務改善の勘所

今回は、「働き方改革」の真の目的でもある「業務改善」について掘り下げてみたいと思います。

まずは自社を知る。チェックリストで確認してみましょう

多くの工務店・ビルダーで課題となるのが、営業・設計・工事・アフターそれぞれの担当業務や引継ぎが不明確で、結果としてそれが生産性を阻害していることです。まず、自社の何が足りないかをセルフチェックすることをお勧めします。住宅産業塾で企業診断する際に実際に確認している31項目をご紹介します(右図)。ぜひチェックしてみてください。

- | 業務改善ポイントセルフチェック | |
|--------------------------|-----------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 業務フロー(業務の流れ・仕事のやり方)はありますか? |
| <input type="checkbox"/> | 業務内容が明確になっていますか? |
| <input type="checkbox"/> | 業務フローに基づくプロセス管理をしていますか? |
| <input type="checkbox"/> | ベストセールシステムはありますか? |
| <input type="checkbox"/> | 勝敗要因分析をおこなっていますか? |
| <input type="checkbox"/> | 見込客発見システムはありますか? |
| <input type="checkbox"/> | 設計・作図基準はありますか? |
| <input type="checkbox"/> | 標準施工詳細図(マニュアル)はありますか? |
| <input type="checkbox"/> | 積算基準(拾い出し・単価基準)はありますか? |
| <input type="checkbox"/> | 完成した図面と完全な仕様を作成していますか? |
| <input type="checkbox"/> | 引越システムはありますか? |
| <input type="checkbox"/> | お客様最終確認(お客様と各担当者会議)をしていますか? |
| <input type="checkbox"/> | 現場きれい(1日5回清掃)をおこなっていますか? |
| <input type="checkbox"/> | 残手直し工事の引渡をおこなっていますか? |
| <input type="checkbox"/> | 工期厳守が徹底されていますか? |
| <input type="checkbox"/> | 記録(写真・文書)に残していますか? |
| <input type="checkbox"/> | 現場立会い説明・確認は毎回ですか? |
| <input type="checkbox"/> | 職人業者による自主検査制度はありますか? |
| <input type="checkbox"/> | 検査と支払の連動システムはありますか? |
| <input type="checkbox"/> | 品質管理報告書&施工写真集を作成し渡していますか? |
| <input type="checkbox"/> | 監督業務は明確ですか? |
| <input type="checkbox"/> | 監督は現場に何回行き、何を品質管理するか明確ですか? |
| <input type="checkbox"/> | 品質基準がありますか? |
| <input type="checkbox"/> | 標準詳細工程表はありますか? |
| <input type="checkbox"/> | 先行手配管理表はありますか? |
| <input type="checkbox"/> | 事前発注システムはありますか? |
| <input type="checkbox"/> | 個別原価台帳&一覧表はありますか? |
| <input type="checkbox"/> | 違算分析をしていますか? |
| <input type="checkbox"/> | CSアンケートを実施していますか? |
| <input type="checkbox"/> | CSアンケートの分析をしていますか? |
| <input type="checkbox"/> | クレーム分析・違算分析はなされていますか? |

いかがでしょうか? 8割がた できた会社は業務の仕組み化が相当に進んでおり、自社で業務改善を継続できている会社と言えます。 が少ないということは、生産性を下げている要因が多く、業務改善の必要性が急務です。

行うべきは、業務の棚卸と業務フローの作成

業務改善の最初のステップは業務フローの整理です。住宅事業の特徴として、営業、設計、工事、アフター各部門に担当者を置くのが一般的ですが、担当者の業務や引継ぎが不明確なためにミス・ロス・ムダが多く発生し、低い生産性の主因となっています。ここにメスを入れない限り業務改善は不可能です。

まずは、顧客発生、商談から成約、設計から工事、そして引き渡しからアフターまでの業務を、時系列に沿って書き出してみましょう。

次に、その業務の流れをもとに、発生する具体的作業の中身を書き出して、詳細な一覧表にします。これが業務フローの原型となり、いわば自社にとって背骨のようなものになります。

ポイントは、これらの作業を担当者任せにせず、社員みんなですることです。それにより自社の業務の流れはどうだったのか、各社員が何をしているのかを互いに共有することができます。

業務フローを整備し生産性阻害要因を発見、排除

業務フローを作り、業務内容をはっきりさせた結果、今まで生産性を阻害してきた要素が明らかになってきます。本当はやらなくても良い、もしくは効率を悪くしているような業務、その他さまざまな「ミス・ロス・ムダ」の原因となるものが見えてくるでしょう。そのため、次の段階では一覧化した業務フローとその内容から、生産性を阻害する要因を取り除き最適な形に更新していくという作業を進めてください。

このポイントは、一連の作業を継続することです。世の中の変化に伴い、最適であった業務フローにも今までになかった問題点が必ず出てきます。見直しと更新の継続が必要であるということです。

今回は、自社の状況を知り、業務を見直すことに焦点を当てて紹介しました。外に目を向けることも必要ですが、問題は身近なところに隠れています。ぜひ、自社が今どんな状況かを理解し、変えるべき点を変えてください。

EIDAI HISTORY 第3回 海外事業の変遷

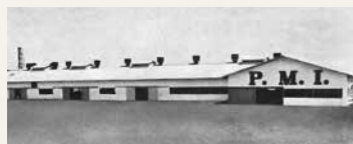
当社では1960年代から海外に進出し、事業を展開してまいりました。第3回目はこの海外事業の歴史についてご紹介します。

1961年ニューヨークに出張所

1946年、合板メーカーとして創業した当社は、合板を大量に消費する米国で販売の足掛かりを築こうと、1961年、海外初の拠点として米国東部の大都市ニューヨークに出張所を開設しました。1962年には合板用原木の主要産地であったフィリピンに駐在員を置くとともに、サンフランシスコにも出張所を構えました。1963年にはカリフォルニア(ブルネイ)に、また1965年には豪・シドニーに出張所を設けるなど、もっぱら合板の販売と原材料の仕入れを目的として海外に進出しました。

それと並行する形で、当社は最先端技術の修得あるいは海外での製造販売をにらんだ事業を展開し、1964年にはシンガポールで、合板生産を行う合弁企業のPMI社(パン・マレーシア・インダストリアル・リミテッド)を立ち上げるとともに、正式に「海外事業部」を発足させました。

また、1966年には人工乾燥機の世界的メーカーであるロバート・ヒルデブランド社(ドイツ)と業務提携を行い、積極的に先端技術の獲得にも乗り出しました。



シンガポールのPMI社

1970年代、海外投資が絶頂期に

1960年代後半、当社は国内製造拠点の拡充を図りながら、全国に販売網を築いていきました。そして再び海外に目を向け、1969年、米国のシカゴに現地法人E社(エイ・アイ・インダストリーズ・インコーポレーテッド)を設立しました。1970年には米国向けに単板を製造、販売していたシンガポールの大手合板メーカー、キャメル・ブライウッド社の経営権を獲得しました(1971年にシンガポール永大に名称変更)。これを機に、米国だけでなく欧州市場の販路を開拓するため、1971年、ロンドンに出張所を開設しました。

さらに、1973年には日本の商社と合弁で、ブラジルに合単板及び製材品の製造、販売を行うエイ・アイ・ド・ブラジル(ブラジル永大)を、また、同社の製品を米国向けに輸出する窓口として、1975年、ブラジルにEAS社(永大アメリカ)を設立しました。

ブラジル永大では、原材料を確保し、持続可能な経営を目指すためアマゾンで植林事業も行いました。



ブラジルでの植林事業

ベトナム、インドネシアに生産拠点

ブラジル永大の事業が終結した2008年以降、当社にとって海外拠点のない状態が続いていましたが、2011年、豊富な労働力や地理的な優位性からベトナムに着目し、同国北部の工業団地内に、フローリングの製造を行うEVC(永大ベトナム)を設立しました。

同社は、2012年から工場が本格的に稼働し、現在では無垢フローリング、挽き板フローリング、シートフローリングを安定的に生産する一大拠点へと成長を遂げました。

さらにASEAN諸国の中でも、特に目覚ましい経済発展を遂げるインドネシアに着目した当社は、2015年に市場調査を行う狙いでジャカルタ駐在員事務所を開設しました。そしてその2年後の2017年、同国にEDI(永大インドネシア)を設立しました。

EDIでは、2018年に工場が稼働し、現在はインドネシア現地仕様のシステムキッチンの開発、生産を手掛け、その拡販に取り組んでいます。



展示会で現地仕様のキッチンをPR

※当社が会社更生法の適用を申請した1978年2月以降も存続していた海外拠点はEII社(～2003年)、EAS社(～2004年)、ブラジル永大(～2008年)の3社のみ

編集後記

56年ぶりに東京で開催されるオリンピックを控え、現在、都内では道路などのインフラ設備や会場となる建物を整備するための工事が行われています。「日本の原風景」の取材で都内を巡る機会を得ましたが、古いものが取り壊されて新しいものに置き換わっていくのとは対照的に、昔ながらの風景がまだまだ多く残されていたことに、一種の感動を覚えました。

永大産業株式会社 マーケティング部 広報課 ©2019Eidai Co., Ltd.

また、幹線道路を外れて一歩、横丁や路地などに入ると、長くそこにお住まいになっている方同士が井戸端会議をしていたり、小さな弟の面倒を見ている女の子を見かけたりしました。おそらく普段は気付かないだけで、身近な普段の生活の中にも「日本の原風景」は存在するのだらうと、今回の取材を通じて考えさせられました。